

ヨハネ・パウロ2世の友人、スタニスラオ・ナギ枢機卿

ローマ、2011年5月18日 (ZENIT.org)

ヨハネ・パウロ2世とスタニスラオ枢機卿の二人の最初の出会いは、ともに若い教授であったとき、ルブリンからクラコフに向かう汽車のコンパートメントで顔を合わせたときであった。最後に会ったのは、2005年1月21日、教皇の部屋での夕食をともにしたときで、その数日後、教皇は自分が「第三のバチカン(第三バチカン公会議?)」と呼んでいたジェメリ病院に入院した。二人の付き合いは30年に及ぶ友情と、神学と教会に関する熱い議論を伴ったものであった。その議論が、大自然の中の遠足や雪の上でのスキーの間に行われることもしばしばであった。スタニスラオ・ナギ枢機卿は1921年生まれ、ヨハネ・パウロ2世によって司教に叙階される前に枢機卿に任命された。この枢機卿の頭に様々な記憶がよみがえる。



5月1日、友人カロルの列福式が行われていたとき、枢機卿の姿は聖ペトロ広場ではなく、ポーランドの軽井沢ともいべきザカポネにあった。ヴォイティーワと一緒に何度もスキーに興じた場所である。ナギ枢機卿は、ローマでベネディクト16世が列福のミサを挙げていたのとほとんど同じ時間に、ファチマの聖母の小聖堂でミサを挙げた。ミサは感謝のミサで、ポーランドで最初のヨハネ・パウロ2世に捧げられた祭壇を祝別した。

枢機卿は1978年10月22日、ヴォイティーワが教皇に選出されたときもローマにいなかった。教皇は、その独特の軽い皮肉をもって、彼にそのことを触れたそうだ。枢機卿の言うには、「教皇の着座のときにローマにいたポーランド人の司祭の一人が、新教皇の手紙を私に渡してくれたのですが、それを読んでとても感嘆しました。それにはこう書いてあったのです。『教皇と教会における教皇の役割について研究をしている神学者が、教皇に会いに来ないとは、いったいどんな神学者なのか。』」

最初は大学の同僚としてつきあってきたが、ヴォイティーワがクラコフの大司教になると、大司教に呼ばれて、神学の問題についての助言や、教区のシノドゥスの準備のために協力を求められた。ナギ枢機卿は言う。「私は自分が彼の友人だという感覚はありませんでした。なにせ、彼と私を隔てる距離は大きかったですから」と。

「私は彼をきわめて卓越した知性の持ち主、非凡な才能にあふれ高い倫理感をもつ人物と評価していました。とても私には追いつけるレベルではないと思っていました」

バチカンでは、ヴォイティーワはすでに著名人で高い評価を受けていた。「パウロ6世は、ヴォイティーワを知っていて、敬愛していました。1976年の四旬節には、教皇庁の人々のために黙想会の指導を頼まれました」とナギ枢機卿は言う。「ヨハネ・パウロ1世の死は、ヴォイティーワにとってショックでした。一抹の不安が彼の脳裏をよぎったように思えました。ポーランド人は、彼の価値をよく知っていましたが、他の枢機卿たちの目にもそれは明らかでした。しかし、誰も、ポーランドの主席大司教であったステファン・ヴィチンスキー枢機卿でさえ、ヴォイティーワがイタリア人の候補者を押しつけて教皇に選出されるとは考えていませんでした」

「私が彼の選出を知ったのは、西側の地下ラジオ放送によってでした。ラジオのアナウンサーの方が私よりもずっと驚いていました。私はルブリンにいましたが、学生たちが大きな喜びを爆発させているのを見ました。そのとき、私の知っているヴォイティーワが手の届かないところに行ってしまったと感じました」

しかし、その予感の間違った。ヴォイティーワは、クラコフの新しい大司教フランシセク・マカ

ルスキー枢機卿の叙階式に参加するように、彼をローマに呼んだ。ナギ枢機卿は語る。「私が飛行機から降りると、一人の男性が近づいてきて、教皇との晚餐に誘われ、それから教皇のところまで連れて行かれました。そうして、私は初めて白い司祭服に身を包んだヴォイティワに会ったのです」

「彼は何も変わっていませんでした。かつて何時間も私と一緒に山であらゆるテーマについて話し合った兄弟のように接し、率直で、開けっぴろげで、暖かい人でした。それと同時に、威厳に満ちて、沈着さと聖性の光が輝き出ているように感じました」

「私がそのとき以来ずっと考え続けていることがあります。いつから私は彼を将来列聖される人物だと思うようになったのか」と言って、こう続けた。「最初にそれを感じたのは、彼の祈りの深さを見たときでした」

山の中で「私は彼の素朴で気さくな人柄を知りました。しかし同時に、いつも祈るために静かな場所に隠れようとしていることにも気づきました。あの当時からすでに神秘家であったのです。この印象は、彼の26年の教皇在位中にますます強くなっていきました」。ナギ枢機卿はバチカンと夏の避暑地のカステルガンドルフォで何度も教皇と一緒にミサをたてることがあった。「教皇様が祭壇に近づかれると、別の世界の人間になったかのように見えました。もう年をとって病気に苦しむようになると、この変身はもっと鮮明になりました」

その聖性のもう一つのしるしは、「病気の中でも、仕事を休むことをせず、その無限の忍耐をもって苦しみを耐え忍ぶその姿です」

「教皇様がこの世から去られたときに、私はそばにはいませんでした。しかし、その数日後、臨終の間に直接その姿を見た人たちに会うことができました。彼らは教皇様の最後の様子と言葉を教えてくださいました。「父のもとに行かせてください」というのがそれです。「この言葉は、彼がいかに生きたかを表していると言えます。全生涯をつうじて、神との出会いのうちに生きていたのですから」と結んだ。